# 亀　井　遺　跡

寝屋川流域南部下水道長吉ポンプ場築造工事に伴う発掘調査報告

1999・3

大阪府教育委員会

# 序　　文

大阪平野南部に立地する亀井遺跡は弥生時代前期後半にはじまる大規模な集落で、近畿自動車道天理吹田線や寝屋川流域南部下水道長吉ポンプ場建設工事に伴う調査で多種多様な遺構・遺物が出土しています。今回、長吉ポンプ場内に重油タンクを築造する計画がたてられたため、工事に先立って発掘調査を実施しました。調査の結果、平安時代・鎌倉時代の水田や弥生時代後期後半の河川の流入を示す砂層を検出しました。工事の深さの関係で亀井遺跡の中心をなす弥生時代中期の層までは調査が及びませんでしたが、当遺跡の変遷に係る新たな資料を得ることができました。調査にあたり御協力いただいた関係各位に感謝すると共に、今後とも文化財保護行政に御理解賜りますようお願い申し上げます。

平成11年３月

大阪府教育委員会
文化財保護課長　鹿野一美

# 例　　言

1．本書は大阪府教育委員会が大阪府土木部の依頼を受けて実施した、寝屋川流域南部下水道長吉ポンプ場重油タンク築造工事にともなう亀井遺跡発掘調査報告書である。
2．調査は大阪府教育委員会文化財保護課調査第２係主査岩崎二郎が担当して、平成10年８月から現地における調査を実施し、引き続き遺物整理を行い平成11年３月に終了した。
3．調査の実施にあたっては大阪府東部流域下水道事務所他関係各位の協力を受けた。記して感謝する次第である。
4．本書で用いた標高は東京湾標準潮位、座標は国土座標第Ⅵ系、方位は座標北である。

# はじめに

亀井遺跡は大阪市平野区長吉出戸、八尾市亀井町・南亀井町・跡部南町一帯に所在し、弥生時代の集落跡を主たる内容とする複合遺跡である。遺跡は、河内平野南部の沖積平地に立地し（図1）、現在の地表面の標高は海抜約10mである。

この遺跡は、1968年に大阪中央環状線の建設に先立つ平野川改修工事で発見された。1978～1983年にかけては長吉ポンプ場、近畿自動車道大阪線及び平野川改修工事に伴う大規模な発掘調査により、弥生時代の拠点集落としての姿が明らかになり、1992・93年には長吉ポンプ場の拡張工事に伴う発掘調査が行われ、古墳時代後期の大規模な堤防や、弥生時代集落等が検出された。

今回の調査は1992・93年の調査区の東に隣接する場所に重油タンクを築造する工事に伴うものである。タンク築造に必要な地表から約3.9mの深さまで調査した。そのため、調査が及んだのは弥生時代後期の遺物包含層までにとどまった。

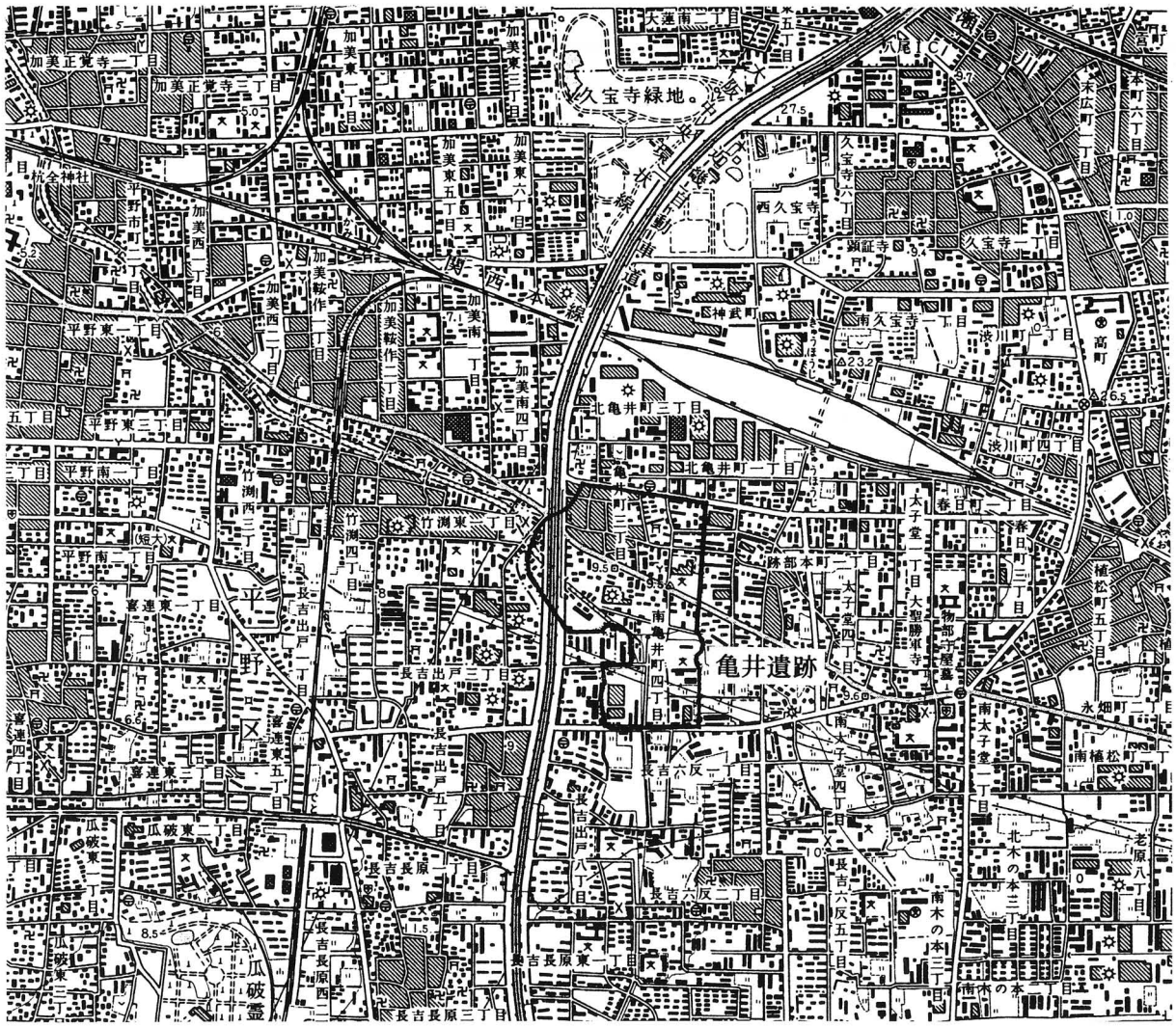



図1　遺跡の位置

# 既往の調査

亀井遺跡は1968年平野川改修工事に伴って発見され、工事に平行して全長200mにわたって調査が行われ、弥生式土器を中心に大量の遺物が出土した。

1969年から1973年にかけて中央環状線や長吉ポンプ場敷地を中心に大阪府教育委員会による範囲確認調査が行われた。これにより遺跡のおおまかな範囲が明らかになったが、遺構の検出は部分的なものに留まり、この時点では弥生式土器が大量に出土するものの、旧大和川水系の氾濫による2次的な堆積であると考えられていた。[1][2][3]

その後、近畿道天理吹田線や長吉ポンプ場建設計画が具体化するにともない、大阪文化財センターが工事予定地の試掘調査を行った。[4][5]

1978年5月から1980年12月にかけて長吉ポンプ場建設に伴う本調査が行われた。これにより、従来言われてきた2次的堆積ではなく、弥生時代前期以来の遺構が重層的に残されていることが確認された。調査の結果、弥生時代前期以降近世に及ぶ各時代の遺構・遺物が検出された。弥生時代においては中期には多種多様な遺構・遺物があり、集落の中心部であったらしいこと、後期には集落の中心が移動し、後半になると自然河川が流入し、それにともない大溝群が掘削されたこと等が判明した。古墳時代前期には後背湿地になったようだが、中期にはふたたび人間活動の舞台となり水田、堤、古墳がつくられた。後期から飛鳥時代にはまた沼状の堆積が続くが、奈良時代以降は安定し、耕作地として利用されてきたことがわかった。また、江戸時代の平野川前身河川も検出された。[6]

1980年6月から1981年11月には、ポンプ場関連諸施設および平野川改修工事に伴う調査が、ポンプ場本体から平野川にかけて実施された。新たに弥生時代中期の方形周溝墓2基が確認された他、各時期の遺構が本体部から北に連続していることが確認された。[7][9]

上記の2つの調査と一部平行する1979年6月から1982年3月には近畿道天理吹田線に伴う発掘調査が南北500mにわたって行われた。この調査で初めて弥生時代前期の集落があきらかになった。中期から後期前半では、北部に集落を画すると思われる大溝群があり、中部に遺構が密集する集落中心部があり、南部は墓域で方形周溝墓がつくられることが明らかになった。中期の溝はポンプ場本体でも検出されており、それぞれ集落の北・南を画するものと考えられている。後期後半には自然河川が流入し、集落は移動している。また、古墳時代以降は主として耕作地として利用されたことが知られた。[8]この3つの大規模調査によって亀井遺跡の全貌がおぼろげながら推定できるようになったのである。

その後、近畿道天理吹田線の橋脚位置決定後の調査が1982年6月～1983年、1985年6月～1986年2月の2度にわたって行われ、東西に拡張された部分から遺構遺物が検出された。[10][13]

1983年2月から1985年10月には南隣の城山遺跡の調査が行われ、方形周溝墓群が南に続くことが明らかになった。[11]

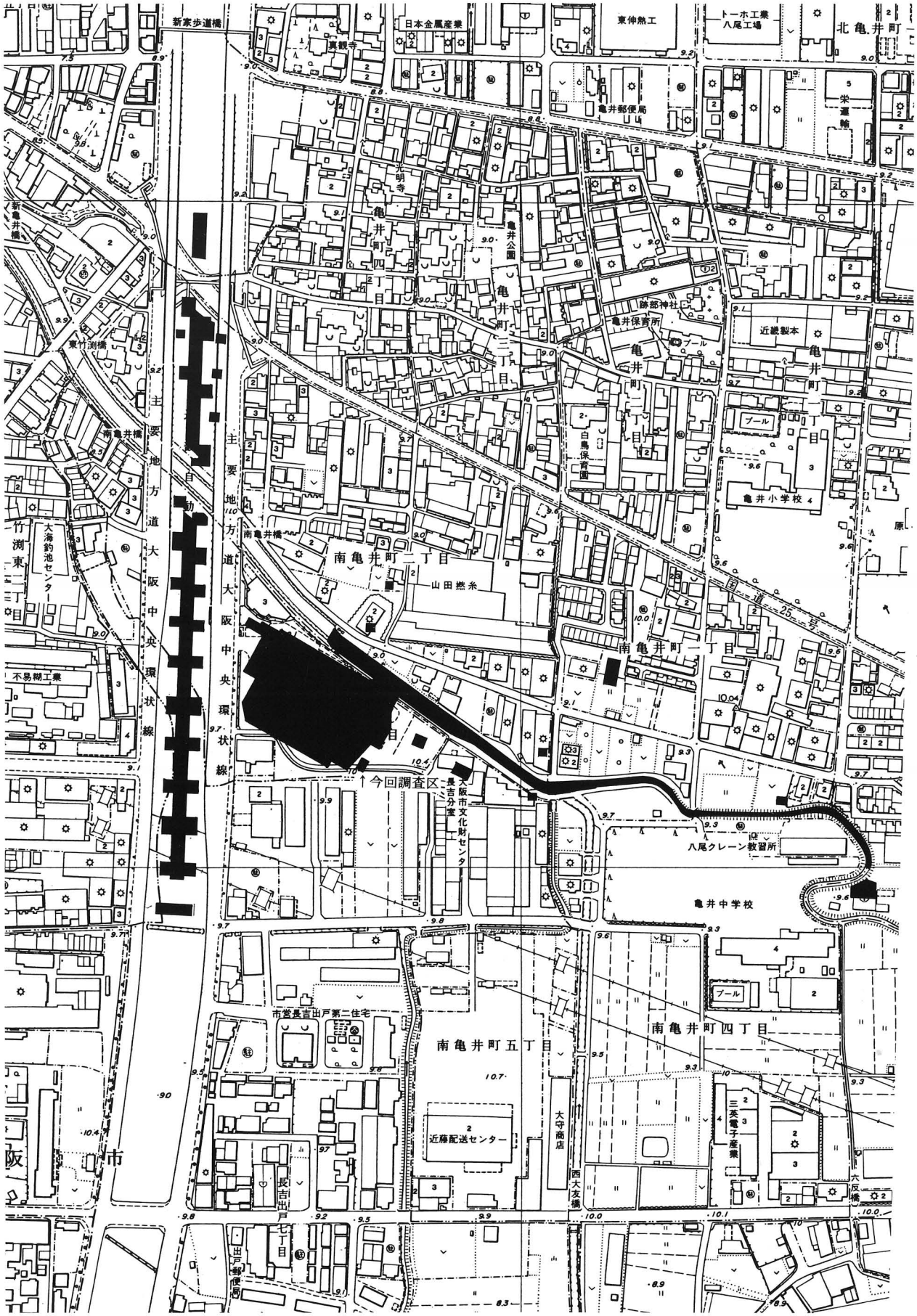

新家歩道橋
日本金属産業
東伸熱工
トーホ工業
八尾工場
北亀井町
真観寺
亀井郵便局
栄運輸
光明寺
亀井町四丁目
亀井公園
亀井町三丁目
跡部神社
亀井保育所
プール
近畿製本
亀井町二丁目
亀井町一丁目
新亀井橋
東竹渕橋
南亀井橋
主要地方道大阪中央環状線
白鳥保育園
亀井小学校
大海釣池センター
南亀井町一丁目
山田撚糸
不易糊工業
今回調査区
大阪市文化財センター長吉分室
八尾クレーン教習所
亀井中学校
市営長吉出戸第二住宅
南亀井町五丁目
南亀井町四丁目
近藤配送センター
大守商店
三英電子産業
西大友橋
六反橋
長吉出戸七丁目
出戸郵便局

図２　調査位置

また、1984年３月から1986年３月にかけて北に隣接する亀井北遺跡南部の調査が行われ、大溝群がさらに北に続くことが明らかになった。[12]

その後数年間は大規模な調査はなかったが、1988年９月から1989年１月にかけて平野川改修工事に伴う調査が実施された。これは1980～81年の平野川改修に伴う調査区の上流を東西約300mにわたって調査したものである。河床部に重複する調査区では古墳時代以降の遺構は存在せず、弥生時代中期から後期前半の集落の北・東を画する溝群が検出された。調査区東端のショートカット部では古墳時代前期の小区画水田、古代・中世・近世の水田が検出されている。[14]

1992年４月から1993年11月にかけて長吉ポンプ場拡張工事に伴う調査が実施された。これは1978～1980年に調査されたポンプ場本体の南に隣接する部分である。弥生時代中期前半の柱穴群があるが中期後半以後の遺構に切られていて当該期の実態は明確にできなかった。中期後半には３条の大溝があり、集落の南限を画するものと考えられている。古墳時代中期には前回の本体部でも検出された堤の続きが確認され、総延長80mに及ぶことが明らかになった。飛鳥時代には古墳時代河川の跡が沼になっており、その上層では平安時代から室町時代の条里型水田にともなう畦畔が検出された。[15]

この1992・93年度調査区の東に隣接する地点に重油タンク築造が計画され、今回発掘調査を実施する運びとなったものである（図２）。

(1) 大阪府教委『八尾市亀井遺跡発掘調査概要』1970.3
(2) 大阪府教委『亀井遺跡発掘調査概要・II』1971.3
(3) 大阪府教委『亀井遺跡発掘調査概要・III』1972.3
(4) 大阪文化財センター『近畿自動車道天理～吹田線建設予定地内遺跡第１次発掘調査報告書（現地調査総括編）』1974.10
(5) 大阪文化財センター『寝屋川南部流域下水道長吉ポンプ場築造工事に伴う亀井遺跡発掘調査報告書』1978.3
(6) 大阪文化財センター『亀井・城山』1980.12
(7) 大阪文化財センター『亀井遺跡』1982.3
(8) 大阪文化財センター『亀井』1983.10
(9) 大阪文化財センター『亀井遺跡II』1984.10
(10) 大阪文化財センター『亀井（その２）』1986.3
(11) 大阪文化財センター『城山（その１）』1986.3
(12) 大阪文化財センター『亀井北（その３）』1986.3
(13) 大阪文化財センター『亀井（その３）』1987.3
(14) 大阪府教委『1988年度亀井遺跡発掘調査概要』1989.3
(15) 大阪府教委『1992・93年度亀井遺跡発掘調査概要』1994.3

# 調査の成果

今回の調査区は1992・93年度調査区（ポンプ場本体南半）の東に隣接する地点で、調査面積は上面で約170㎡である。約２ｍの盛土を機械掘削し、地表下２ｍからタンク築造に必要な地表下3.9ｍまで発掘調査を実施した。調査区南壁の土層を図３に示す。

第１層は灰オリーブ色粘質シルトで、削平を受け10㎝程度しか残っていない。第２層は灰オリーブないし暗灰黄色の粘質シルトである。上面で南北方向の鋤溝を検出した。第３層は灰色粘質シルトで下部はマンガン斑が多く集積する。上面で段、溝等を検出した。第４層は灰色粘質シルトで、橙色の酸化鉄斑が集積する。第５層はオリーブ褐色シルトである。

第６層は暗オリーブ灰色粘土で、炭酸カルシウムの集積が見られ、植物遺体を少量含む。第７層は禾本料植物の遺体を多く含む暗緑灰色粘土である。第８層は暗緑灰色粘土である。第９層は黒色粘土で、弥生時代後期の土器を多く含む。９層は部分的に暗オリーブ灰色砂層に切られている。東南から西北に流れる流路状の堆積である。

以上の第１～９層は1992・93年度調査区の東南部の層序とおおむね一致するものである。

第２層上面で鋤溝群を検出し、これを第１遺構面とした（図４上）。鋤溝は南北方向で幅20㎝前後である。鋤溝からは土師器・磁器の細片が少量出土した。この面の標高は約7.8ｍである。調査区内では畦畔は検出されなかった。近世の耕作面であると考えられる。

第３層上面で溝や段落ちを検出し、これを第２遺構面とした（図４下）。溝や段の方向は第１面と同じく南北方向である。段落ちにはヒトや寓蹄類の足跡が散見され、須恵器・瓦質羽釜の破片が出土した。３層から黒色土器の破片が１点出土した。この面は層位からみて1992・93年度調査区の第１遺構面に相当し、鎌倉時代の耕作面と思われる。

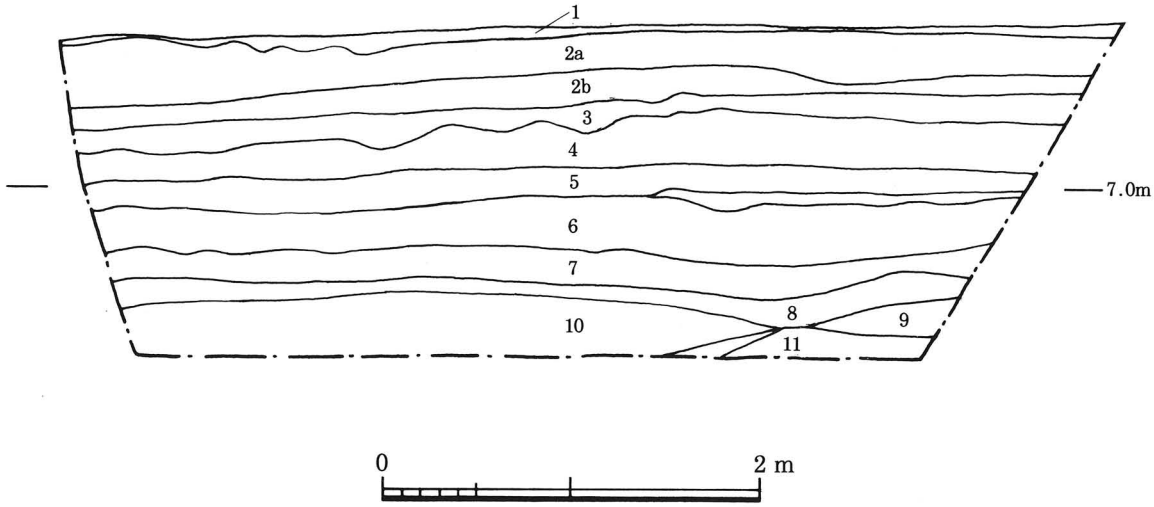
第５層上面は1992・93年度調査区の第２遺構面に相当し、平安時代の水田面と考えられるが、調査区内では畦畔等の遺構は検出できなかった。５層から土師質羽釜の細片が１点出土した。

第６・７層は厚い粘土の堆積で、特に７層には植物遺体を多く含む。遺物はほとんどなく、側溝掘削時に７層から土師器または弥生式土器の細片が１点出土したのみである。1992・93年度調査区で飛鳥時代の沼とされた層に対応する。

第８層上面は1992・93年度調査区の第３～５遺構面に当たるが、今回の調査区内では遺構は検出できなかった。８層からは遺物は出土しなかった。

第９層は黒色粘土で弥生時代後期後半の土器を含む（図５）。この層を切る砂層を検出したが、予定掘削深度に達したためそれ以上は掘り下げなかった。そのため明確にはわからないが、この砂層は東南から西北にむかう流路であろうと思われる。過去の調査で明らかになっている弥生時代後期後半の河川の流入の一端を示すものであろう。砂層上面の標高は約6.6ｍである。

これより下部には弥生時代中期・後期の遺構遺物が存在するはずであるが、予定深度に達したため調査を終了した。




1　7.5Y　5/2 灰オリーブ色粘質シルト
2　2.5Y　4/2 暗灰黄色粘質シルト
3　5Y　5/2 灰オリーブ色シルト（茶褐色斑）
4　5Y　5/1 灰色粘土（茶褐色斑多い）
5　5Y　5/1 灰色粘土（橙色斑）
6　2.5Y　4/6 オリーブ褐色シルト
7　5GY　4/1 暗オリーブ灰色粘土（炭酸カルシウム）
8　7.5GY 3/1 暗緑灰色粘土（植物遺体多く含む）
9　10GY　3/1 暗緑灰色粘土（植物遺体含む）
10　2.5GY 2/1 黒色粘土
11　5GY　4/1 暗オリーブ灰色砂
12　5GY　3/1 暗オリーブ灰色シルト質粘土

図３　南壁土層断面

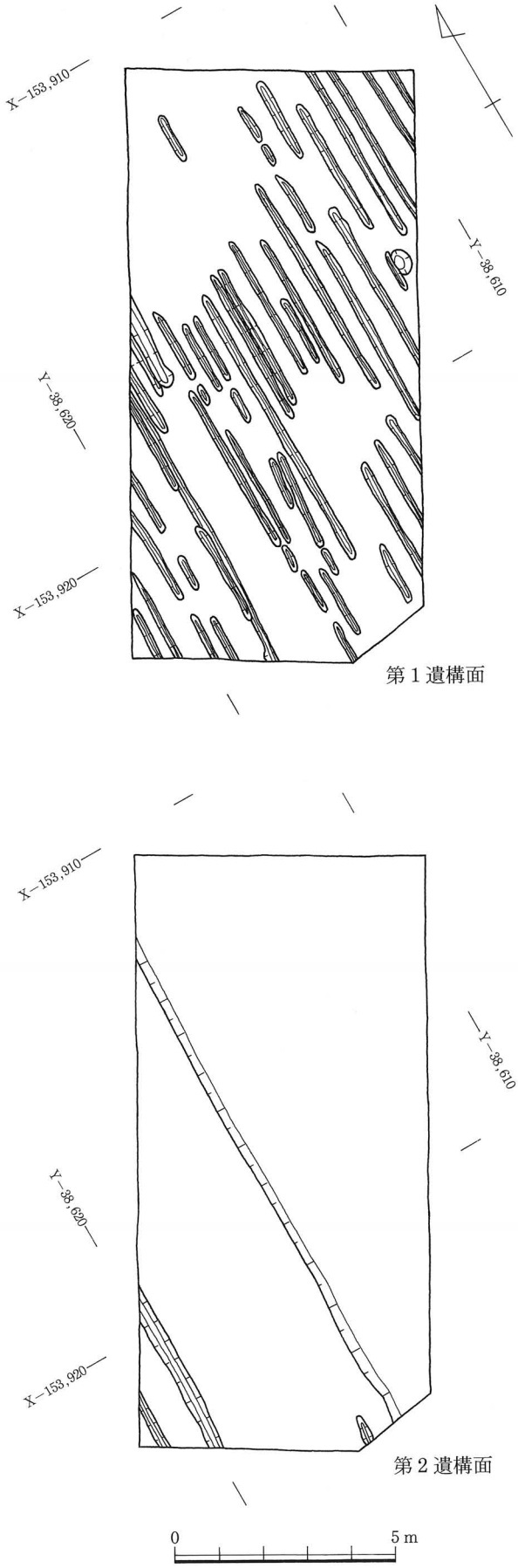
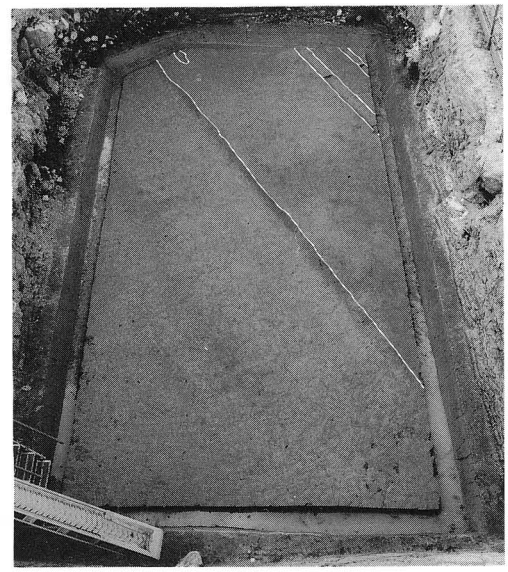


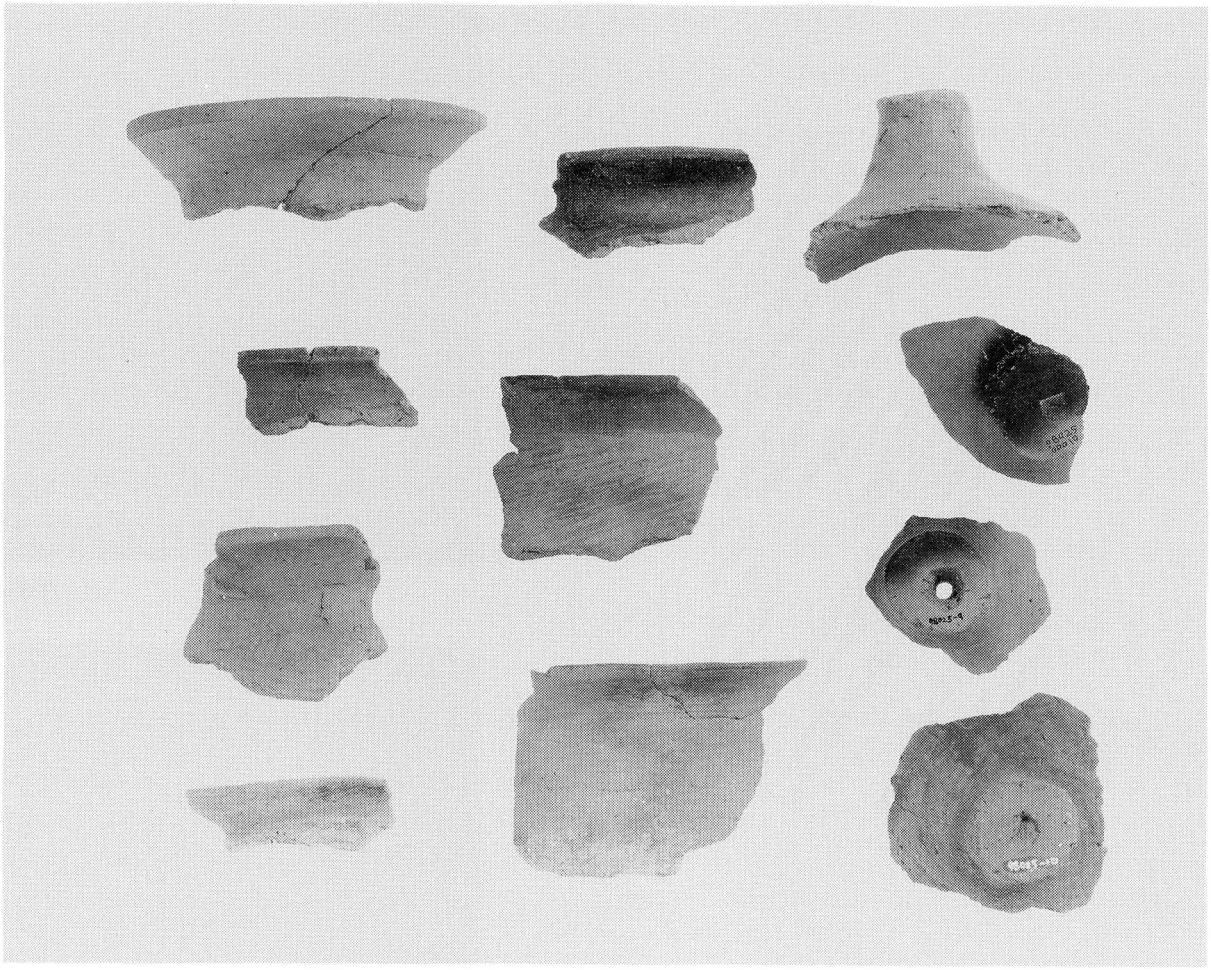

図４　第１・２遺構面

第１遺構面



第２遺構面

掘削最終面



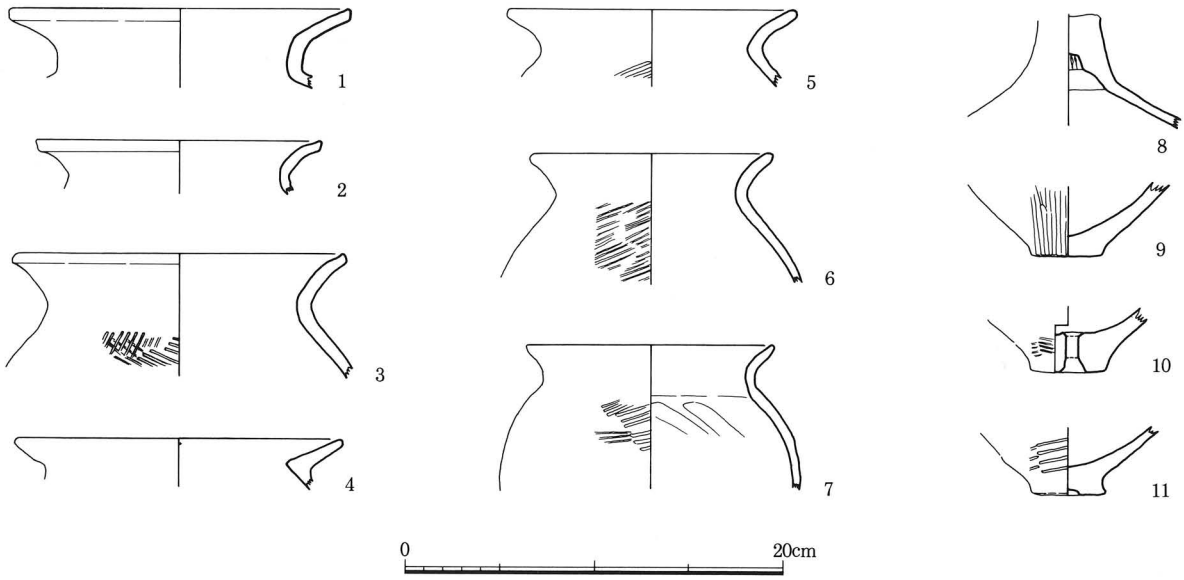



図5　第9層出土土器

# 報　告　書　抄　録

| | |
|---|---|
| ふりがな | かめいいせき |
| 書名 | 亀井遺跡 |
| 副書名 | 寝屋川流域南部下水道事業長吉ポンプ場築造工事に伴う発掘調査報告 |
| 巻次 | |
| シリーズ名 | |
| シリーズ番号 | |
| 編著者名 | 岩崎二郎 |
| 編集機関 | 大阪府教育委員会 |
| 所在地 | 大阪市中央区大手前２丁目 |
| 発行年月日 | 1999.3.31 |

| 所収遺跡名 | 所在地 | コード | | 北緯 | 東経 | 調査期間 | 調査面積 | 調査原因 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 市町村 | 遺跡番号 | | | | (m²) | |
| 亀井遺跡 | 大阪府<br>八尾市<br>南亀井町<br>３丁目 | 27212 | 26 | 34°<br>36′<br>42″ | 135°<br>34′<br>44″ | 平成10年<br>８月３日～<br>10月14日 | 172m² | 重油タンク<br>築造 |

| 所収遺跡名 | 種別 | 主な時代 | 主な遺構 | 主な遺物 | 特記事項 |
|---|---|---|---|---|---|
| 亀井遺跡 | 耕作跡<br>耕作跡 | 鎌倉時代<br>平安時代 | | | |